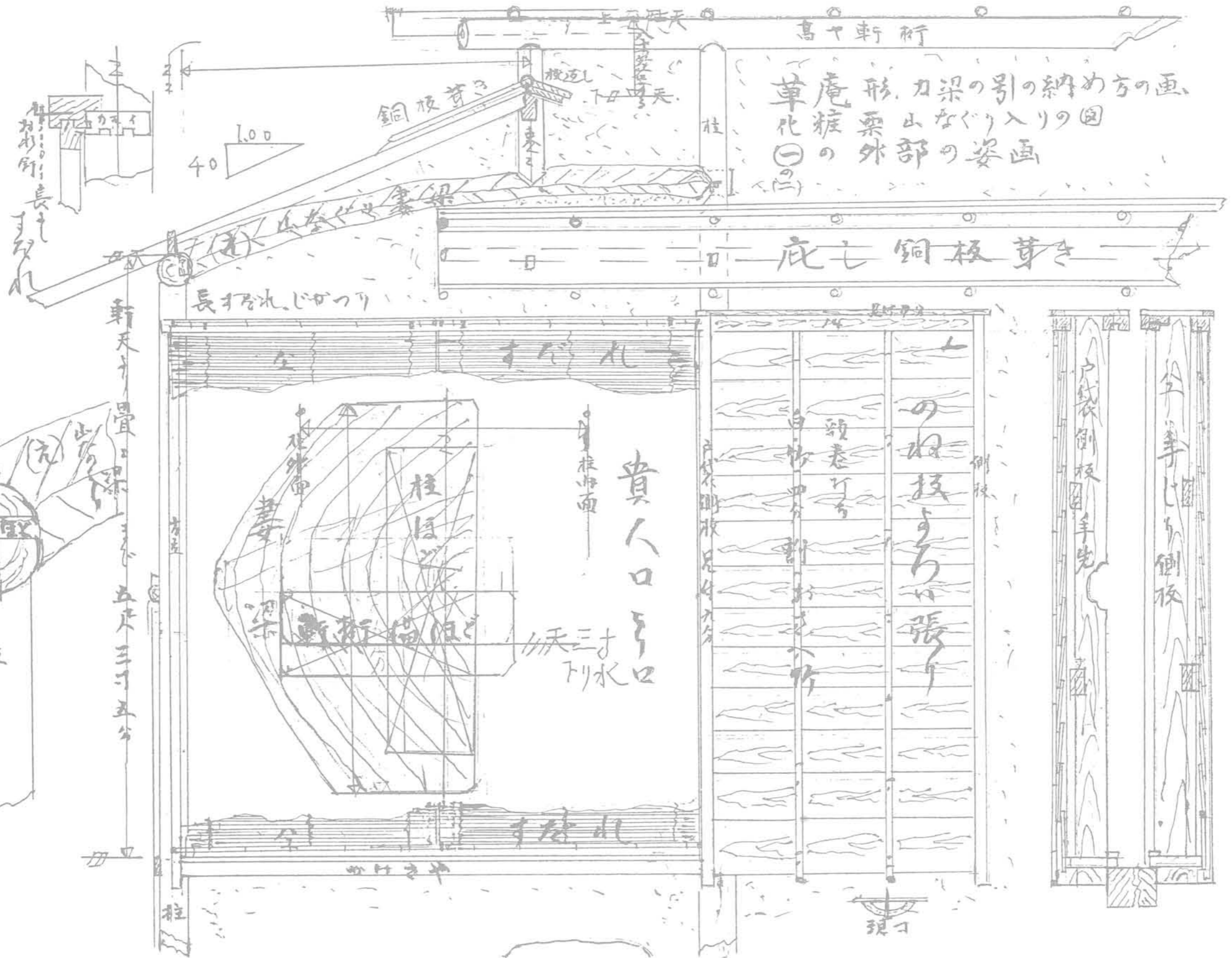


茶室普請詳細図集



凡例

未熟なる私如き職人が書くべき事では無いのですが次の時代に使うために若い公職の人々が研究される為に少しでも参考に成ればと思ひ書いた次第です。未熟なる書き方下見にくいと思ひます。が何分職人の書いた画ですからお許下さい。私の若い時よりの経験や私の思ひを書いてみますから、参考にして下さい。昔より茶席建築は各流の大家の先生方が自介で設計されて造られたる建物ですから、各流の式作法を取り入れて造つてあると私は思つて居ます。次第又各流の先生方のお考へにて造られたので建物の形や寸法も違ふと思ひます。我々が造る場合は右之次第に付、昔よりの各名席の写を造るのが良いと私は思ひます。ですから私の書いた各画は職人として初歩の茶席建築造りに必要なる構造画及び廻回画を書いた次第に付、未熟なる各画を参考までにして下さい。

序 文

数寄屋建築の工匠として、尊敬している俣野忠蔵氏が、このたび六十年にわたる研鑽のすべてを、一冊の本にまとめられ、後の世に残されようとしていると聞き、誠に時宜を得たものとして喜びに堪えない。

近年、茶の興隆は目を見張るものがある。しかし、それに使われる茶室が、いかなる技法により、いかに施工されるべきであるか、その伝承を爲す者の数は次第に減少しつつある。俣野氏は嚴重に古風を守りつつ、その上に彼獨得の解釈を加え、茶室建築に確固とした境地を創造された人である。その人の技術の集大成が、後世においてこの道に續く技術者のよき指導書となるばかりでなく、伝統建築物の技術史として、高く評価されるであらうことは疑ひをもたない。

俣野氏と私の交際は五十年に及ぶ。その間に造って頂いた茶室は十数軒に達する。寡黙の人、俣野氏の老いてなお衰えない、情熱に深く敬意を表しこの一文を捧げる次第である。

昭和五十五年七月

目次

一、京間の決め方	一
二、あの一四帖半席本勝手	二……四
三、いの一深三帖中板席	五……七
四、うの一ニ帖台目席	八……九
五、あの一又隠の形四帖半席	十……一八
六、い一の席の正面の <small>外面及内部</small> のかべ地の決め方	十九……二十一
七、あの一の仕事の納め方、各席共通	二十二……二十五
八、いの一のかき窓の <small>かべ地</small> 貫の納め方	各席共通 二十六……二十八
九、此より建方用材の使い方、各席共通	二十九……三十三
一〇、茶室建起しの場合の <small>建方の時内法材組こい</small> 各内法材の納め方	三十四……三十九
一一、茶室化粧軒先廻りの納め方及種類	各席共通の形 四十……四十一
一二、茶室化粧棟及妻の納め方及形	各席共通 四十二……五十七
一三、茶室内法及天井材の納め方及仕口	各席共通 五十八……六十七
一四、置道幸及炉壇箱の造り方	六十八……六十九
一五、腰掛待合の形及納め方、各流共通の形	七十……七十二
一六、中門、名梅見門の形、各流共通の形	七十四
一七、砂雲隠の形	七十五……七十六
一八、井戸家上方の形	七十七
一九、各家の水屋の形及納め方	七十八……百。一

私は京都市中京区竹屋町通り間之町にて建築業祖父吉衛門
父吉次郎の二男として明治三十四年十月十五日生れる。
父事業の手違ひにて私は十二才の時大工見習として、
父の友人市内八坂の塔境内の川島久吉大工棟梁方に
参る。川島久吉と申す人は、借家造りにあて錆丸太柱
を多く使った人です。市内東山区高台寺二年坂の
函側にて藤井音次郎氏の借家四十程造っております。現在
京都市の町並保存地区に指定されております。

私はこの工事中に十二才で見習となる。十八才より親元
に歸り大工職人として、数々の棟梁の仕事をする。
二十才より大坂藤木工務店本店の款寄屋建築の
下請を関西方面にてする。其の間同社社長邸宅を
造らせて戴きました。又自分の仕事にて、茶席を造る。
昭和三十七年より四十九年まで藤木工務店倉敷支店、
現副社長の設計にて、茶席建築工事多く造らせ
て戴き、紙面を持って和田副社長の御引立を、
厚く御礼申し上げます。

俣野忠藏

七十九才